

2022年春闘アピール

要求に確信をもって組合員の力を結集し、職場からともにたたかう 2022年春闘

組合員のみなさん

新型コロナウイルスの感染拡大は、ワクチン接種の普及によって一時的に収まっていたものの、感染力の強い変異株オミクロンの出現で、再び急激に拡大しています。欧州の各国ではロックダウンや在宅義務化などの行動制限がおこなわれ、世界経済の成長見通しも下方修正を余儀なくされており、先行きはますます不透明となっています。

日本でも、秋口までは感染拡大が落ち着いていたことから、行動制限が緩和されることとなりました。そうしたことから、製造業を中心に企業業績が改善し、上場企業の9月期決算では全産業の純利益額がコロナ禍前の水準を上回るなど、景気回復が期待されていました。しかし、世界と同様に、年明けから急激な感染拡大となり、今後の景気への下押し圧力は強まっています。政府のコロナ対策も十分とは言えず、国民の不安は増しています。

こうしたなか、「成長も分配も実現する」と強調する岸田首相は、「業績がコロナ禍前の水準に回復した企業は3%を超える賃上げを期待する」と財界に対して具体的な水準をあげて賃上げを要請しました。これに対し経団連は、企業業績のばらつきを踏まえて一律の賃上げを見送ったうえで、「自社の状況に応じて労使協議で賃金を決める『賃金決定の大原則』が重要」とする従来の姿勢を変えていません。

損保各社は、その規模の大小を問わず、既存市場の縮小、自然災害の頻発・甚大化、デジタル化や働き方改革などビジネスモデルの変化への対応が求められる事業環境の先行き不透明さに加えて、未だ終息が見通せないコロナ禍というかつてない事態に直面し、各経営は、危機感や焦燥感をさらに強めています。そして、これを乗り切り将来に向けて、本業における収益を安定的に拡大し続けるための基盤づくりに躍起となり、さらなる「収益力の強化」と「生産性の向上」、「合理化・効率化」の動きを一層強めています。よって、今春闘においても、引き続くコロナ禍をめぐる情勢は深まっており、各経営は危機感を強め、厳しい姿勢・出方になるものと想定されます。そのもとで昨春闘同様に、従来にも増して、自らの都合や課題、政策を最優先として春闘交渉に持ち込み、厳しさを強調して職場に「春闘どころではない」とした意識を醸成し、機関と職場を分断する動きに出てくることも想定しておく必要があります。

一方職場では、各経営の危機感や焦燥感が歪みや犠牲となって転嫁され、労働生産性を追求する動きも強まり、「働く者の生活と雇用、労働条件」に対するリスクが現実のものとなっています。そして、コロナ禍に直面し、そのための環境整備も不十分なまま、その負担と頑張りが強いられることにもなっています。2022年春闘アンケートでは、産業と職場、生活と処遇、将来に対する不安、会社、政策、賃金、働き方等に対する不満は大きくなっており、大変切実な実態は強まり、その要求は高まっています。

組合員のみなさん

2022年春闘は、コロナ禍のもと集まるのが難しく、要求実現に向けたとりくみ、“意思結集”と“団結”が困難な状況におかれることを認識しておかなければなりません。しかし、私たちには、常に組合員一人ひとりの声と思いを大切にして、どのような困難な事態にも怯まず乗り越えてきたという、70年の歴史があります。今春闘は、その経験と教訓を活かし、とりまく情勢に真正面から向き合い、経営の一方的な出方は許さず、その手には委ねず、自らの手で生活と職場を守り、確かな明日への展望を切り開くため、たたかう春闘です。

私たちは、

- 各支部・独立分会の課題とたたかいを全体で共有し、それぞれの理解と納得を大事に、全組合員の知恵と力を結集して、ともに全損保統一闘争をたたかいます。
- これまでの春闘の到達点に立ち、労働組合の力と可能性に確信をもち、共感を広げ主張と団結を力に、たたかいを職場から構築し、主体的にすすめます。
- とりまく情勢、経営の出方を冷静に見定め、直面する課題、もたらされる事態には真正面から向き合い、「生活と雇用、労働条件を守る」という不動のスタンスのもと、職場の現実と思いに寄り添い、そのときに最も求められる労働組合の役割を追求します。

全損保統一闘争のもと、掲げる要求に確信をもち、その実現に向けて組合員の力を結集し、2022年春闘を職場からともにたたかっているようではありませんか。

2022年1月15日

全日本損害保険労働組合 支部独立分会代表者会議